

国 語 科

濱 名 秀 晃
中 山 典 子
清 水 義 之

1 国語科における「よりよい未来を志向する子」

私たちは日常の様々な場面で、言葉を使って生活をしている。物事を認識したり、自分の考えを深めたり、他者とコミュニケーションをとったりすることも、言葉を使って思考・判断・表現することを通して行われる。しかし、情報化の進展に伴い、子どもを取り巻く情報環境が変化する中で、視覚的な情報と言葉との結び付きが希薄になり、知覚した情報の意味を吟味したり、文章の構成や内容を的確にとらえたりしながら読み解くことが少なくなってきた。

また、新学習指導要領では、国語科において育成をめざす資質・能力を、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力とし、国語科が国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。さらに、子どもが学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目してとらえたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。「言葉による見方・考え方を働かせる」ことが、国語において育成をめざす資質・能力をよりよく身に付けることにつながるとしている。

そこで、本校国語科では、上記の資質・能力を意識しつつ、「話す・聞く」「書く」「読む」ことの知識や技能の習得を図るとともに、子どもが習得した知識や技能を用いて思考し、判断し、表現することで、実生活や実社会で生きて働く国語力を育成していくことをめざす。目的意識や相手意識をもたせることで、学習の見通しをもち、場面に応じて、言葉をもとに論理的に思考したり、豊かに想像したり、適切に言葉に表したりしながら、子どもは言葉と対話をする。そこには根拠があり、根拠をもとに他者と対話することによって、子どもは多様なものの見方・考え方を知り、見方を広げたり、考えを深めたりして、もう一度、言葉との対話をする。そのような対話をくり返し、自分の考えをより確かなものにしていくことで、子どもの国語力は向上し、言語生活も広がっていく。

このように、学習の中で子どもが身に付けた言葉の力は生きて働く力となり、国語科の枠を超えて、他教科の学びや実生活・実社会においても使える国語力となるだろう。

以上のことから、国語科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる

- ・単元のゴールや本時の課題・目的意識をもち 自ら学び続ける子
- ・言葉と対話し 他者の思いや考えを共有し 自分の考えをより確かなものにしていく子
- ・今の学びを生かして 未来に必要な国語力を高めていく子

2 国語科における決める授業デザイン

国語科の授業において、話したり聞いたり書いたり読んだりしながら国語力を向上させていくことは、指導事項を身に付けるだけでなく、各教科の実生活・実社会に生きて働く言葉の力を身に付ける上でも重要である。国語力を向上させるためには、まず、今までの学習経験や生活経験を想起させながら、子どもに好奇心や学びの必要感をもたせ、目的意識を明確にすることから始まる。そこに、相手意識ももたせることで、これからの学習の見通しをもつことができる。見通しがもて、学習課題がはっきりすれば、根拠をもとに自分の考えを決めることができる。その際、個々が言葉に着目できるような手だてを教え、根拠やそれに基づく理由、自分の考えを書かせる。そして、それらを価値付けていくことで、子どもの意欲を高めていく。

言葉や叙述から自分の思いや考えに根拠をもつことができたときに、その思いや考えを友達と対話したり、別の視点から考え直したりして比較し合う中で、お互いの相違点に気付き、様々な考え方があることに気付くことができる。友達の考えや別の角度からの視点によってもう一度、自分の考えを決め直す。そうすることで、様々な見方・考え方を広げたり、深めたりしていくことができる。

これらの学習をくり返していく過程で、単元を通して身に付いた力を子どもに認識させるために、自己を見つめ直したり、言葉を実生活に生かしたりする場を設定する。自己を見つめ直す場では、今まで決めたことをふり返ることで、新しい言葉や表現を再認識し、自分が決めるに至った過程を省みることができ、自分で決めたことに達成感を味わうことができると考える。言葉を実生活や実社会に生かす場では、今まで学んできたことから身に付けた力と今学んだばかりの単元や教材文で身に付けた力を生かし、話したり聞いたり書いたり読んだりしていく。

また、国語科の学習を読書活動に結び付け、たくさんの本に触れ合わせることで読書を楽しみ、生涯にわたって読書を通じ、国語の知識を形成していく。このような経験を積み重ねていくことで、未来に必要な国語力が高まっていく。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

既習の学習経験や生活経験等に関連付けながら、単元を通して子どもが学びに向かって自ら進んでいけるような単元のゴールや学習課題を子どもとともに決めていく必要がある。「やりたい」「知りたい」という好奇心や、「できるようにになりたい」という必要感を子どもにもたせるために、モデルとなる成果物や既習の学習経験で解決するには少々難しい課題を提示する。こうすることで、目的意識が生まれる。そこに、誰を相手にして伝えるのかという相手意識ももたせることで、学習の見通しをもつことができる。それが学びに向かい続ける力の原動力となり、自分でよりよく決めることへとつながっていく。

また、課題解決の際、個々が言葉に着目できるように、根拠となる文にサイドラインを引かせたり、根拠に基づく理由や自分の考えをノートや付箋、吹き出し等を書かせたりする。考え方の視点のよいものを教師が紹介したり、コメントを入れたりする等、子どもの考えを意味あるものとして価値付けていくことで、自分で決めることができるようにする。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

教師が板書等で視覚化の工夫をしたり、新しい視点を提示し焦点化したり揺さぶったり疑問や対立を生み出したりすることで、子ども同士が言葉をもとに対話するようにする。こうすることで、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。そして、その過程で試行錯誤しながら順序や筋道を立てて考え直し、自分の考えをもう一度決める場を設定する。

同じ言葉から違う考えをもつこともあれば、同じ考えでも根拠にする言葉が違うこともあるように、出会った言葉のとらえや解釈は子どもによって違いがある。子どもが言葉のとらえや解釈の違いをもとにして考えを広げたり深めたりするためには、一人一人の考えの違いに対し言葉を根拠にして交流し、他者の考えと比べながらもう一度自分の考えを決め直すことが大切である。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

単元や本時の学習の終わりに、どの言葉で自分の考えが深まったのか、自分がどのようなことを学んだのか等をふり返ることで、自分の学びを自覚し、自己を見つめ直すことが、次の学びへの意欲へとつながっていく。また、学んだ内容だけでなく、自分がどうやって学んだのかをふり返ることで、自分の学び方を自覚し、次の学びに活用できるようにする。そのために、ふりかえりの視点を子どもが決めていくことが、自己を見つめ直すことの習慣化につながると思う。そのため、初期段階では教師がふりかえりの視点を与え、それを単元ごとに蓄積していく。こうして、ふりかえりの視点を広げていくことで、子どもは学習に即したふりかえりが自分でできるようになり、満足感や達成感を味わえるようになると思う。

さらに今まで学習したことと単元で学習したことをもとに、音読劇等で表現したり、成果物としてリーフレットや意見文等に表したりする。そうすることで、登場人物の心情を踏まえて表現したり、今まで知らなかった言葉や表現の工夫を使えるようになったり、自分の経験や例を出して文章でよりの確に伝えたりすることもできるようになる。また、単元を通じ読書生活を広げていくことで、様々な世界観に触れ、擬似的に体験したり知識を獲得したり自分の考えを広げたりすることができる。このような経験を積み重ねていくことで、未来に必要な国語力を高めたことが自覚できるようになると考える。